

# 現代アメリカ政治の新潮流

——オバマ新大統領誕生とアメリカ——

大谷立美

はじめに

2008年11月4日はアメリカ合衆国の歴史において、新たに刻まれる画期的な日となるであろう。その日アメリカで、アフリカ系アメリカ人、すなわち黒人が初めて大統領に選出されたのである。名前はバラク・オバマ（以降、オバマと呼ぶ）、1961年生まれ。47歳。イリノイ州選出1期目の上院議員である。彼は民主党内での、特にライバルであったニューヨーク州選出ヒラリー・クリントン上院議員との熾烈な選挙戦を勝ち抜き、大統領指名候補者を勝ち取った。そしてこの日オバマは、340人以上の大統領選挙人を獲得し、ジョン・マケイン共和党候補を圧倒したのである。

振り返ればアフリカ大陸から無理矢理に連れてこられ、奴隷として強制労働をさせられた黒人の地位や処遇は、歴史的にアメリカ大統領選挙の争点となってきた。1860年には奴隷制反対を掲げたリンカーンが当選したため国が分裂し、南北戦争となった。そして1863年、リンカーン大統領による「奴隷解放宣言」。1960年には50年代から始まった公民権運動の指導者キング牧師の不当逮捕に対して、民主党のケネディ候補は南部白人票を失うことを覚悟のうえでキング牧師の即時釈放を要求した。そしてケネディ暗殺後1964年、副大統領から昇格したジョンソン大統領は「公民権法」を議会に提出し、黒人に対する歴史上初め

での全面的な差別撤廃の法律を成立させた。オバマの当選は、こうした「奴隷解放宣言」,「公民権法制定」に続く、歴史的な節目といえる。

公民権運動が盛り上がる1963年8月28日、人種差別撤廃を求めて、20万人以上の人びとが首都ワシントンに集まった。「ワシントン大行進」である。そのときキング牧師は目にうっすらと涙を浮かべ、「私には夢がある。いつの日か私の子供が、肌の色で差別されることなく、人間として生きることができる日が来ることを…」と語った。あのとき遠く未来を見つめた牧師が、その55年後にアメリカに黒人大統領が誕生するとは、夢にも思わなかったに違いない。

本稿では、最初にバラク・オバマを1人の人間として考察したい。次にオバマはなぜ当選したのかを分析したい。そして最後はオバマ政権を担う主要閣僚を分析する。

### 「一滴の血のルール」

バラク・オバマは1961年8月4日、ハワイのホノルルで誕生した。1961年といえばその年の1月20日にジョン・F・ケネディが史上最年少43歳という若さで、第35代合衆国大統領に就任した年である。しかもケネディは歴代大統領がほとんどWASP (White Anglo - Saxon Protestant), すなわち「白人, イギリス系, (キリスト教の) 新教徒」のなかで、初めてのアイルランド系, カトリック教徒であった。事実選挙戦において、ケネディがカトリック教徒であることが、「最終的に忠誠を尽くすのはローマ法王か、それとも合衆国か」という宗教的議論がしばしば争点となった。そして2008年、今度は初めての黒人大統領の誕生となる。

オバマの父親はケニア人である。名前は同じバラク・フセイン・オバマ。イスラム教徒だった。イスラム社会では息子は父親の名前を継ぐことが多い。ここでは本人と区別して、オバマ・シニアと呼ぶ。オバマ・シニアは1959年、23歳のときにハワイ大学での初のアフリカ人留学生として経済学部に入學する。

当時のケニアはイギリスの植民地支配から独立し、有為な青年を欧米の大学に学ばせ、祖国建設の指導者に養成しようとしていた。オバマ・シニアはそのひとりだった。彼はハワイ大学で学ぶ留学生を組織し、国際学生協会というグループを立ち上げ、初代会長となった。学力も抜群に優れ、成績優秀者として3年で経済学部を卒業している。その彼がロシア語の授業で出会ったのが、スタンリー・アン・ダナムという白人の女子学生であった。スタンリーとは父親の名前であったが、これは父親が息子欲しさにつけた名前前で、彼女は通称アンと呼ばれた。彼女の一家は1959年のカンザス州からハワイにやってきた。その同じ年に、オバマ・シニアもハワイにやってきた。やがて2人は結婚し、1961年8月、オバマが生まれた。黒人の父親と白人の母親との間に生まれた混血児である。<sup>1)</sup>

アメリカには奴隷制度時代に考え出された「1滴の血のルール」がある。<sup>2)</sup> それはその人に1滴でも黒人の血が流れていれば、たとえあとの99%が白人だとしても黒人と見なすという考え方である。このルールは、白人が自分たちの純潔を維持するために作られた。その意味で50%の血をもつオバマはまぎれもなく黒人である。しかし半分は白人。その結果、「オバマは奴隷の祖先をもつ本当の黒人なのか」という疑問が、今回の大統領選挙では、特に黒人有権者のなかでしばしば議論となった。

ハワイ大学を卒業したオバマ・シニアに、ふたつの大学から奨学金の申し出があった。ひとつはニューヨーク州にあるニュースクール大学で、授業料、生活費などすべてを含めた全額奨学金だった。他方はアメリカを代表する名門校ハーバード大学だった。しかしこちらは授業料のみの奨学金だった。アンは夫に妻子を同行させるように懇願したが、「私は最高の教育機会を見逃すことはできない」といって単身でハーバード大学のあるボストンに向かった。卒業した彼はその後妻子のいるハワイには戻らず、祖国ケニアに帰国してしまった。その後父親がハワイに戻ってきたのは1度だけである。そのときオバマは10歳になっていた。オバマにとって父親は、そのときの思い出だけである。その1度だけの出会いが、オバマを「父親探しの人生」に導くこととなる。

## ジャカルタでの少年時代

父親がケニアに帰国したことにより、両親は離婚した。しかしアンはすぐにインドネシアからハワイ大学に留学していた別の男性と知り合った。ロロ・ソエトロというのがその人物だった。ふたりは2年間の交際を経て結婚した。オバマが6歳の時だった。結婚と同時にソエトロが突然、ハワイから姿を消した。彼が急に帰国した理由は、アメリカ政府により滞在ビザが取り消されたこと。そして兵役に就くために本国に召還されたのであった。アンは息子とインドネシアに行くことを決意した。母子が父親の住むジャカルタにたどり着くまでに3日かかった。その途中日本に立ち寄ったとき、船上で抹茶アイスクリームを食べたことをオバマは覚えている。こうしてオバマは10歳までの4年間をジャカルタで過ごすことになる。

インドネシアの人口は現在2億4万人で世界第4位である。そのうち1億7千万人がイスラム教徒で、これは1国としては世界最大の人口である。オバマの継父もイスラム教徒である。最初オバマはカトリック系の学校に通ったが、その後イスラム系の学校に転校した。オバマの正式な名前は、バラク・フセイン・オバマである。特にミドルネームのフセインは一般のアメリカ人にとっては、かつてイラクの独裁者であったサダム・フセインを思い出させ、多くのアメリカ人が「オバマはイスラム教徒である」という印象をもった。そのことが大統領選挙期間中にしばしば話題となり、オバマにとっては大統領候補者として、自身に対する大きな誤解となった。しかし彼にとってこの若き日に、キリスト教以外の国で生活することで、異教徒の人間と一緒に生きる寛容さと知恵を学んだ。

インドネシアは発展途上の国である。先進国のアメリカからやってきたオバマにとって、その生活水準の低さは想像すらできなかった。貧富の差が激しく町には物乞いがあふれ、飢えに苦しむ人びとを目の当たりにした。自分の家には電気は通じているもののエアコン、冷蔵庫、水洗トイレなどなかった。ハワイでの快適な生活しか知らなかったオバマにとってこの経験は、貧富の差とい

う世界の現実を認識させ、異文化の多様性を経験する貴重な体験となった。

ジャカルタでの両親の夫婦仲は、オバマにとって異父妹のママが生まれたものの、徐々に悪化し、結局別居、離婚となった。その間母親は、オバマへの教育に力を注いだ。彼女は「息子はアメリカ人であり、息子の本当の人生はインドネシアではなく祖国アメリカである」ことを信じていた。ジャカルタのインターナショナル・スクールに通わせたかったが、その経済的余裕は彼女にはなかった。そのため現地の学校に加え、アメリカの通信教育を息子に受けさせた。彼女は週5日、毎朝4時に息子を起し、仕事に出向くまでの3時間みっちり息子に個人教授をした。特に母国語である英語に対して、きびしくレッスンをおこなった。オバマが政治家になってからの雄弁家としての高度な資質は、生まれつきの天性に加えて、こうした母親のきびしい家庭教育にあったと推測できる。オバマが大統領に就任し、その1ヶ月後の2009年2月24日、連邦議会合同会議における演説を行い、「教育はまず家庭から始まる！」と喝破したのは、この少年時代の思い出による信念によるものと考えられる。<sup>3)</sup>

### 自己のアイデンティティに悩む青春時代

1971年、10歳だったオバマは単身ハワイに戻され、祖父母と暮らすことになった。そしてオアフ島にある名門私立校プナホウ・アカデミーに入学した。彼は5年生に編入し、1979年に卒業するまでそこで学んだ。プナホウはキリスト教宣教師が創立した学校で、その生徒は裕福な白人やアジア系であった。そのなかでオバマは数少ない黒人であり、彼が子供心に、自己の黒い肌を意識し始めたのはこの頃からである。

ハワイはアメリカの中では特殊な州である。本土からはるか遠く離れた太平洋の島であり、その人口はアジア系、南太平洋出身者が多数を占める。白人は少数派で、黒人はさらに少ない。その多民族社会で人々が仲良くともに生きる、これがアロハ・スピリットと呼ばれるハワイの心である。オバマはそのアロハの世界で様々な民族の人々と毎日過ごし、肌の色、生活習慣、宗教の違いなど

自然に受け入れるようになった。同時にまた自分の黒い肌を真剣に意識するようになっていった。

プナホウでオバマはレイという黒人の友人ができる。彼は軍隊で働く父親の転勤でロサンゼルスからハワイにやってきた。親友同士となった彼らはいつも一緒に過ごした。本土からやってきたレイは、白人と黒人の対立を折にふれオバマに語った。必然的にオバマは人種の違いを意識するようになった。学校に行くときレイから白人の悪口を聞かされ、家に帰るとそこで彼を待っていてくれる人は、自分を心から愛してくれている白人の祖父母である。ある夜彼は、祖父からひとつの事件を聞かされた。それは祖母が仕事から帰宅中、バスの停留所で大柄な男から物乞いを迫られたという。かろうじて難を逃れ家に帰ると、祖母は「黒人は恐ろしい」と夫に語る。その話を聞かされたオバマは、崖から突き落とされたような気持ちとなる。「自分はどちらの人間なのか?」。このアイデンティへの苦悩は、この先もずっと続くことになる。

プナホウでオバマはバスケット・ボールを始めた。当時ハワイ大学のチームは全米選手権にも出場するほど強く、ハワイの人々の応援は熱狂的だった。オバマもそのひとりで、プナホウ・チームでなかなかレギュラー選手にはなれなかったものの、寸暇を惜しんで一生懸命練習をした。オバマがバスケットをとおして学んだことのひとつに、政治家としてのオバマに大きな影響を与えたものがある。それはスポーツの世界には人種差別はないということだ。どんなスポーツであれ、目的は勝利することである。そのために選手全員が一丸となって目標に向かって努力する。そこには白人も黒人もない。勝つことしかない。政治の世界でも同じである。オバマが初めて全米的に注目された2004年民主党全国大会の基調演説で、「白人のアメリカも、黒人のアメリカも、アジア系のアメリカもない。あるのはひとつ、それはアメリカ合衆国だ!」と彼は叫んだ。<sup>4)</sup> その気持ちをさかのぼっていくとそのひとつの到達点に、オバマがプナホウ時代にバスケット・ボールをとおして学んだ平等という信念がある。

オバマがハワイに戻り、プナホウに通い始めた年のクリスマス、母と異父妹のマヤ、そしてケニアの父親が帰ってくるようになった。父親の滞在はおよそ

1カ月ほどであったが、オバマにとってそれが初めてのそして最後の父親と過ごしたひとときだった。彼が父親に抱く思い出はこの一瞬であり、これによって彼はその後数年間、ますます自己のアイデンティティの迷路をさまよった。彼はケニア、カンザス、インドネシア、ハワイと彼の人格を形成したすべての文化を理解しようとした。しかしそれはむしろ彼を混乱させた。1979年プナホウの卒業とともに「本当の自分とは誰か」の答えを求めて、オバマはカリフォルニアに旅立った。

カリフォルニア、ニューヨーク、そしてシカゴへ

オバマが入学したのはロサンゼルスに郊外にあるオキシデンタル・カレッジという名のリベラルアーツの大学である。彼はそのキャンパスでハワイではない、本土の、本当のアメリカ社会で育ってきたアフリカ系アメリカ人と出会うことになる。彼らはオバマを中心にいつも徒党を組み一緒に行動した。オバマは生まれたときから「バリー」という愛称で呼ばれていたが、このころから自身も自分のことを、そして仲間たちも「バラク」と呼ぶようになった。自己の原点に戻るに、まずは自分の名前に戻った。オキシデンタル時代、彼に興味深いエピソードがある。あるときオバマはジョイスという女子学生を黒人学生の集会に誘った。すると彼女は「私は黒人でなくて、多人種人」と答えた。彼女の父親はイタリア人、母親はアフリカ人、フランス人とアメリカ原住民との混血。しかし「1滴の血のルール」からすれば黒人である。しかし彼女は、「多人種からどうしてひとつだけ選ばなければならないのか」とオバマに迫った。彼女のそのことばは、白人と黒人の混血である自分が、なぜそのひとつを選ばなければならないのかという根源的な問いかけとなった。

オバマはこのとき生まれて初めて政治活動に参加した。それは当時南アフリカにおけるアパルトヘイト（黒人差別）政策に反対するものであった。キャンパス内で行われたその集会で、オバマは初めて人前で演説した。1分間という短いスピーチであったが、意外にも拍手喝采を受けた。彼はこのときから、偉

大なる雄弁家の片鱗を見せ始めていた。しかしそれ以外は平凡な学生生活だった。オバマは新たな刺激と挑戦を求めて、ニューヨークのコロンビア大学に編入した。というのはオキシデンタルには優秀な学生を対象に、コロンビア大学と交換編入プログラムがあったからである。

イーストハーレムに近い安い家賃のアパートで、オバマのニューヨーク生活が始まった。彼は政治学を専攻し熱心に勉強した。特に自分のルーツを求めて、黒人の歴史、文学、そしてキング牧師やマルコムXといった黒人運動家の著作を毎晩読みふけた。

ニューヨークで21歳となった年の11月、オバマは叔母のジェーンと名乗る女性のナイロビからの電話を突然受け、父親が交通事故で死んだことを知らされた。10歳の時、ハワイで父親に出会ったその思い出が走馬灯のように彼の頭を駆け巡り、しばらく涙があふれて止まらなかった。

1983年オバマはコロンビア大学を卒業した。彼はコミュニティの組織に関わる地域活動家、すなわちコミュニティ・オーガナイザーとしてキャリアを目指す決心をした。「コミュニティを形成し、コミュニティのために闘い、庭と同じようにコミュニティの世話をする」というのがオバマの考えだった。しかしニューヨークで就職活動したものの、そのチャンスはなかった。やむを得ず経営コンサルタントの会社に職を得たものの、コミュニティ・オーガナイザーへの夢はあきらめ切れなかった。2年後やっと働き口の話が来た。それはシカゴからだった。

### コミュニティ・オーガナイザーの経験が政治家としての資質を育む

地域社会活動という仕事は、貧困に苦しむ人びと、社会的に不当な扱いを受けている人びと、劣悪な生活環境にいる人びとの声を聞き、その救済や改善を行政に要求し実現することを目標としている。そのためには近隣住民を結束させ、重要な課題について話し合い、彼らと団結しなければならない。そうすることによって失業者の救済、雇用の創出、再就職のための職業訓練、学校設備



の改善等といったことを、政治家と行政に訴えることができる。しかし当時のシカゴは初めての黒人市長ハロルド・ワシントンと白人市議会が激しく対立し、貧しい黒人地域への行政サービスはひどく遅れていた。そうしたなかオバマはコミュニティ開発プロジェクト（DCP）という団体に働き始めた。

オバマにとって最初の仕事は、人びとが何に苦しみ、どんな要望をもっているかを知ることだった。そのためには彼らに直接会い、話し合うことだ。しかしそれはむずかしいことだった。人びとは毎日の生活に追われ、オバマが申し込んで会うにしても夜しかなかった。しかも彼らは仕事で疲れきっていて、ともに彼の相手をしてくれなかった。しかしオバマは辛抱強く語りかけ、彼らの胸の内が開くのを待った。そして住民は、オバマの誠実さに徐々に心を開くようになっていった。結果として人びとと膝をまじえての語り合うこの経験は、有権者との直接対話という政治家としての資質をオバマのなかに大きく育てることとなった。

問題が判明し、人びとの要求がはっきりしたとき、次はそれをどのように解決するかである。そのためには住民に対して具体的な解決策を提示し、彼らを立ち上がらせ、団結させなければならぬ。しかし慣れない町での彼の仕事は、最初はうまくいかなかった。個々人間、組織間の利益争いのため、彼は何度も困難に遭遇した。しかし彼はあきらめず、住民たちの参加意欲を高めるために、彼らの心の中に飛び込んでいった。

オバマが手がけた数多くのプロジェクトの中で、大勝利したのがオールドゲルド・ガーデンズ公営住宅の再開発だった。オールドゲルド・ガーデンズは戸数2000戸の団地である。いずれも2階建てのレンガ造りの建物は老朽化し荒れ放題だった。またその周辺は廃棄物処理施設やゴミ埋め立て処分場、下水処理場もあった。そのため環境汚染が著しく、団地付近全体に異臭が立ち込め、近所の川に棲む魚には変色や奇形が発生していた。この現実を目の当たりにしたオバマは、コミュニティの教会に注目し、聖職者と信徒を動員することを考えた。礼拝後牧師に呼びかけさせ集会を開き、参加者に日頃不満に感じていることを遠慮なく話し合わせた。教会以外でおこなった集会もやがて教会内で開か

れる大集会に発展していった。オバマはまず失業と再就職対策として、その地域に雇用機会を誘致することに力を入れた。具体的には小売店、レストランなどのサービス業などを中心に、単純労働を提供するビジネスの誘致に成功した。また環境問題については地域浄化運動を組織化することができた。一方ゴミ処理サービスや公園の整地の充実、青少年向けの就職セミナーの開催、そして犯罪監視プログラムも開始した。こうした活動の中でオバマは、政治力と法律の重要性を痛感した。なぜならばそうしたコミュニティの改善と発展は、地元の議員の理解と協力なしではなかなか前に進まず、また議員を説得するには正当なる法律の知識が求められるからだ。

コミュニティ・オーガナイザーとしてオバマは初めて実社会で幅広い経験をした。それが同時に彼の政治家として資質を育てることとなった。誰とでも話し友人となれること、その人たちに問題を明確にし、解決のための具体的な方法を説明し相手に協力させること、また目標達成のために綿密な計画を立てること、そして結果を急がず、できることから一つひとつ始めること。オバマを支援したコミュニティのアルヴィン・ラブ牧師は2007年3月シカゴ・トリビューン紙のインタビューで次のように語っている。「バラクは根っからのコミュニティー・オーガナイザーと私はつくづく思います。彼が今やっていることはまさにそれでしょう。ただ今回は、組織化するコミュニティのスケールが（国家という）とてつもなく大きいということです」<sup>5)</sup>

「効率的な方法で問題を解決するには、法律の知識を身につけなければならない」、こういってオバマはバーバード法律大学院で学ぶため3年後シカゴを去った。そのときコミュニティの仲間は、「オバマは私たちだけのための人ではない」といって彼を温かくボストンに見送った。

### ミッシェルとの結婚

大統領選挙に出馬したときから、「オバマは本当に黒人か？」という疑問がしばしば投げかけられてきた。それも白人からではなく黒人からの問いかけで

ある。それは彼が白人と黒人の混血であるという事実。そしてその父親はケニア人で、祖先が奴隷ではないという根拠によるものだった。アメリカの黒人社会でカリスマ的な公民権運動指導者であり、1988年大統領選挙にも立候補したジェシー・ジャクソン師は、シカゴ時代の早くからオバマに注目してきたものの、ひんばんに「本当の意味でオバマは真のアメリカの黒人とは思えない」と批判してきた。祖先を奴隷制度にさかのぼるアフリカ系アメリカ人にしてみれば、オバマは半分黒人であってもそれは奴隷ではなく留学生としてハワイに来たケニア人の血でしかない。オバマの存在は、一般的な白人には「白人とアフリカ人に生まれた黒人」と思われ、一方黒人からは「奴隷制度のルーツとは違う人」と見られた。しかしオバマ自身には、長年苦しみ続けてきた自身のアイデンティティを決定する人生の大きな出来事があった。それはミッシェルとの出会いである。

オバマは法律大学院の1年目を終えた夏、研修生としてシカゴの企業弁護士事務所に雇われた。そこで彼の世話をまかされたのがミッシェルだった。彼女も同じハーバード・ロースクール卒で、オバマよりも3歳年下、弁護士としては先輩である。

ミッシェルが育ったのは、オバマがコミュニティ・オーガナイザーをしていたすぐ近く、サウスサイドだった。2008年民主党全国大会で彼女自身が自己を表現したように、そこはシカゴの最も貧しい地域であり、まさに彼女は「サウスサイド・ガール」である。オバマはミッシェルのロビンソン家をしばしば訪ねるようになる。父親のフレイジャーは陽気でやさしい人だった。母親のマリアンは家族の世話をし、子供の学校ではボランティア活動をする積極的な人だった。兄のクレイグは大学時代バスケット・ボールの選手で、当時はサラリーマンだったものの、いつかはバスケット・ボールのコーチになりたいとの夢をもち、オバマとバスケットの話がはずんだ。彼はミッシェルの家を訪れるたびに心が安らいだ。なぜならばそこにオバマが求める家族がいた。彼には父親はいたが、一緒に住むことはなかった。しかしフレイジャーをお父さんと呼ぶミッシェルの横にいて、オバマは彼に父親の姿を重ねた。彼女の父親は30歳のと

き多発性硬化症という病気になり、それから25年間病状がしだいに悪化するなか、家族のために身を粉にして働き続けた。そこにはオバマが求めるやさしい家族思いの理想的な父親の姿があった。

1992年10月3日、二人はオバマが所属するトリニティ教会で結婚式をあげた。シカゴの黒人女性と結婚したことによって、オバマのアイデンティティがついに確定した。それは「私はアフリカ系アメリカ人である」ということである。彼には白人の母親、祖父母がいた。そしてケニア人の父親、インドネシア人の継父がいた。自分がいったい誰なのか、自分探しの人生にそれまで長年ずっと翻弄されて続けてきた。しかしミッシェルに会い、彼女をとおして理想の家族、自分の家族をやっと見つけた。また彼らも自分を家族の一員として温かく受け入れてくれた。オバマにとって、家族のこうしたぬくもりと優しさは初めてだった。オバマが大統領選挙に勝利した後、何人かの政治評論家は指摘する。もしオバマが白人女性と結婚していたらどうであったろうと。それは仮定の話として、どうなったかわからない。もちろん白人社会に入って違った人生になったかもしれない。しかしシカゴでコミュニティ・オーガナイザーとして黒人社会にどっぷりつかり、ミッシェルと出会い結婚し、2人の娘を得た。オバマは半分白人の血であったとしても、もう完全に黒人になった。それはミッシェルが彼をそうしたのである。その夫が2008年大統領選挙で勝利した。人びとは11月5日、シカゴのスタジアムで勝利宣言スピーチ終了後、オバマがミッシェルと2人の娘マリアとサーシャと抱き合う姿を見たとき、そこに次期大統領の雄姿を描き、横にいる魅力的な妻と2人のかわいい娘に、理想のアメリカ家族像を見た。こうしてアメリカの政治は、歴史上初めて人種という大きなハードルを乗り越えた。<sup>6)</sup>

オバマは「脱人種的人間」、それとも宇宙人、もしくはスーパーマン？

2008年の大統領選挙は、アメリカがはたして黒人かあるいは女性の大統領を誕生させるほど変わったのが注目された。結果として民主党は黒人大統領候補

を選出した。しかし実は、その候補者がはたして本当のアメリカ黒人かどうか、いつまでもはっきりしなかった。選挙戦を進めるにあたり、オバマにとって自分が何者なのか、その分からなさが有利に働いた。ケニア人の父親と白人の母親、本土から遠く離れたハワイ生まれ、インドネシアでの異文化経験、大学はカリフォルニアからニューヨーク、卒業したあとハワイには戻らずシカゴで急落下し就職。そして次はハーバード大学。そこで彼は、黒人として初めてハーバード・ロー・レビューというアメリカを代表する法律専門誌の編集長になった。本来であればそれだけの優等生であれば、卒業後ニューヨークなど大都会の一流法律事務所に真っ先に引き抜かれ、高給取りの弁護士になっているはずである。しかしそうはせずに、ミッシェルが住むシカゴにすぐ帰ってきた。「そんなオバマとは何者だ」、この疑問と興味深さが、有権者の関心をそそった。

そのオバマのわからなさを、アメリカで政治活動をなさってきた渡辺将人氏は彼の著書「オバマのアメリカ」(冬幻社)の中で「脱人種的」と表現している。氏によれば今までの黒人指導者のキーワードを「怒り」であった。奴隷制度への怒り、人種差別への怒り、それらはすべて白人への怒りとなった。2005年ニューオリンズを襲ったハリケーン・カトリーナの被害者は、その多くが黒人だった。避難民となった彼らが収容された施設の悲惨さに衝撃を受けた黒人指導者は、「これは奴隷船と同じだ!」と怒りをあらわにした。しかしオバマは怒りのことばを避けた。白人を怒っても何の解決にもならないことを彼は知っていた。大切なのはどうやったらそうした被害者たちを救済するかという具体的な方法論だった。確かにカトリーナの被害は悲惨を極めた。ミッシシッピー川河口にあるニューオリンズがある日突然メキシコ湾に埋没してしまった。しかしブッシュ大統領は事態への対応は遅かった。結局人口のほとんどを占める黒人が犠牲となった。しかしオバマはその黒人たちの先頭に立って怒り狂うことはなかった。<sup>7)</sup>

こうしたオバマのわからなさを、明治大学の越智道雄教授は「宇宙人」、ジャーナリストの町田智浩氏は「スーパーマン」と、彼らの対談集「オバマ・ショック」(集英社)の中でそれぞれ呼んだ。越智教授は、オバマは「絶対的ア

ウトサイダー」と言い切る。事実オバマは人種、階級、宗教、コミュニティ、家族関係などにおいてどこにも帰属してこなかった。また帰属できなかった。逆にいうと、臨機応変にそのときその都合で、どこにでも帰属できる。その柔軟性がある。教授によれば「宇宙人とは否定的な意味ではなく、みんな出口がわからず、てんやわんやのとき現れる人」とのこと。確かにイラク、アフガンにおけるテロとの戦争、未曾有の経済危機、貧困、医療、環境問題等、今や「てんやわんや」のときに、オバマは彗星の如く、すうと私たちの目の前に現れた。少し肌の色は濃いけれども。そう考えると確かに「オバマは宇宙人」という教授の見方は興味深い。一方町田氏は「スーパーマン」ではないかという。スーパーマンは生まれた自分の星が爆発してしまい、ゆりかごに入れられて地球に流れ、カンザス州の農民に拾われる。クラーク・ケントという名前が付けられ、本人は一生懸命にアメリカ人になろうとする。そのために彼はスーパーマンとして、真実と正義、そしてアメリカのために悪と戦う。自己のアイデンティティを求めてさまよい続けてきたオバマは、スーパーマンのように必死でアメリカ人になろうとしてきたのではないか。<sup>8)</sup>

### 「スーパーマン・オバマ」の登場

2008年大統領選挙の結果は、選挙人獲得数ではオバマ365人、マケイン173人で、オバマの圧勝であった。しかし一般有権者投票ではオバマは6,453万票で投票総数の52%、マケインが5,680万票で全体の46%、その差は8%と必ずしも大きいものではない。これは従来共和党の地盤であったバージニア、オハイオ、フロリダといった選挙人の多い州で、オバマが勝利したことが原因である。ではなぜオバマは勝ったのか。それはブッシュ政権8年間でアメリカが大きく分裂し、国民はこの数年間、出口の見えない閉塞感に苦しんできたからである。事実、国民の8割がアメリカは間違った方向に向いていると感じ、世論調査でのブッシュ大統領への支持率は23%しかなかった。これほどまで不人気な大統領は歴史的にも珍しい。外交評論家の岡本行夫氏は、読売新聞の座談会でブ

シュの失政を見て、「残酷だが、後世の歴史家は、ブキャナンなど過去の数人と並ぶ史上最悪の大統領という評価を下すのではないか」と語っている。<sup>9)</sup> 岡本氏の説には、その通りと思われる十分な根拠がある。なぜならば9.11同時多発テロ事件という衝撃がアメリカを襲ったあと、ブッシュは国連を中心とした多くの国々の意見を無視し、単独行動でイラク戦争を始めた。イラクが大量破壊兵器を所有し、アルカイダなどのテロリスト集団を支援しているというのが、戦争を始めるその大義名分だった。しかし後になって、イラクには大量破壊兵器がなかったことが判明した。その誤った大義の結果、4,000人以上のアメリカ兵と100万人以上のイラク人が犠牲となった。そればかりではない。ハリケーンでニューオーリンズが壊滅的な被害を受けたにもかかわらず、被災者の救済は不十分だった。またテロとの戦争による軍事費急増で、クリントン政権時代に達成した財政黒字を、1兆ドルに迫る赤字にしてしまった。こうしてアメリカは国際社会での地位を失墜し、国内もベトナム戦争以来の分裂状態となった。こうなったブッシュの責任は計り知れない。八方ふさがりの閉塞感にあえぐ国民の前に、突然スーパーマンのごとく出現したのがオバマだった。彼の“Change! Yes, we can!”(変えよう、アメリカを！われわれはできる！)をことばは、変化と希望を求める人びとの魂を激しく揺さぶった。天性の雄弁さに支えられた彼のメッセージは、特に若い世代を中心にお互いが共鳴しあい、雪だるま式に「オバマ現象」を膨らませていった。その勢いはアメリカ国内ばかりでなく、アメリカ失望していた多くの国々にも広がることとなる。

#### オバマ勝利の最大の要因は金融危機

2008年9月上旬、リーマン・ブラザーズという会社が倒産した。リーマンは業界第4位の投資銀行であり、また証券会社である。アメリカではこの破綻を機に、金融危機が始まった。今回のそれは、1930年代の世界大恐慌に匹敵する規模だといわれる。実はすでに2年前からサブプライム住宅ローンの破たん、アメリカ経済は混乱をきたしていた。1980年代のレーガン大統領は「小さな政

府」を標榜し、徹底した規制緩和と自由放任の経済政策を進めた。いわゆる「新自由主義」と呼ばれる経済政策である。それでもクリントン時代はIT産業の好況でアメリカはなんとか繁栄してきた。しかしブッシュ時代になると財政赤字の急激な悪化とともにその矛盾が著しく露呈してきた。これは30年間にわたる新自由主義の破綻と呼んでもいい。毎日新聞の斉場保伸氏は「今の世界経済の惨状をたとえると、世界経済という超高層ビルが、リーマン・ショックという大地震で崩壊が始まり、加速度的に崩壊を続けている状態だ。崩壊がいつ止まるか、誰にも分からない。ここに問題の深刻さがある」と指摘している。<sup>10)</sup>

選挙を目前に控えたオバマ、マケイン両候補は、当然のことながらその対応を迫られた。金融危機が報じられた9月中旬、マケインはフロリダにいた。彼はジャクソンビルという町での集会で、「アメリカ経済のフンダメンタルズ(fundamentals=1国の経済状況を示す基本的指標)は健全」と論じた。これは彼が数か月間にわたって繰り返してきたことばだった。すなわち「心配するには当たらない」ということだった。

ブッシュ政権はこの金融危機に対して、7,000億ドルの金融安定化法案を連邦議会に提出すると発表した。このとき大統領候補であったとしても事実上まだともに現職の上院議員であるオバマとマケインは、この法案に即対応しなければならない。オバマは政治的立場を超えてマケインと一緒にこの救済案を支持しよう考えた。しかしマケインは9月24日、この際選挙運動を一時停止し、さらに2日後に予定されている第1回大統領候補討論会を延期しようとしてオバマに呼びかけた。オバマは「次の大統領になる人物がこの金融危機にどう対処するかを、国民は今一番知りたがっている。何よりも大統領の仕事とは、いくつもの困難な問題を同時に解決していかなければならない！」と言ってマケインの提案を一蹴した。結局法案は10月3日採決されたが、このリーマン・ショックに対するオバマの毅然とした態度は国民の信頼感を生む一方、マケインのふらつきは多くの共和党支持者にとっても大きな失望となった。

世界大恐慌の再来とも思われるこの金融危機に対して、オバマの経済政策立



案は迅速だった。彼は今までの「小さな政府」から「大きな政府」、すなわち連邦政府が積極的に経済政策を主導していくことを言明した。まず失業対策では、エネルギーや環境開発の分野で500万人の雇用を創出すること、さらに次世代バイオ燃料の技術開発などに今後10年間1,500億ドルを投資。ハイブリッド車や電気自動車を2015年までに100万台にすることを約束した。さらにオバマが重視したのは、低所得者や勤労世帯に対する税制改革だった。彼は勤労者の95%に減税、低所得者を中心に1人あたり500ドルを支給することを公約した。また年収25万ドル以上の高額所得者には増税、巨額の利益を得ている石油会社への課税強化を発表した。しかしこうした「大きな政府」による経済政策は、当然財政赤字を増大させる。事実、2009年度の赤字額は過去最大だった前年度の2.5倍の約1.2兆ドル(約120兆円)に急膨張すると予測されている。オバマは経済政策ではブッシュ政権以上に困難な道を歩むことになる。<sup>11)</sup>

#### オバマ・インターネット政党

アメリカを代表する週刊誌であるタイムは、2009年新年号の“Person of the Year”にオバマを選んだ。<sup>12)</sup> その記事の中でデイビッド・ヴォン・ドリール (David Von Drehle) 氏は、2008年大統領選挙は、従来の民主党対共和党ではなく、オバマ党対共和党の戦いだったと振り返る。氏が意味することとは何か。それはオバマ陣営が、その選挙戦略にかつてなかったほどの大規模なスケールで、インターネットを中心としたIT技術を活用したことだ。これは2004年の大統領選挙で民主党から立候補したハワード・ディーンの内閣インターネット戦略にヒントを得たものだった。オバマはネット交流サービスの大手企業である「フェイスブック」の創設者を顧問に迎え、オバマ支持者の組織化に成功した。具体的には、支持者の名前、携帯、パソコンのメールアドレス、電話番号、郵便番号をデータベース化し、支持者の自宅から2から50マイル位までの地域で開催される各種イベントの情報をメールでその都度知らせた。さらに個別訪問や電話による支持の要請、有権者登録をしていない人への呼びかけ、

支持者自宅でのミーティングなど、選挙運動に関するありとあらゆる情報が、毎日メールに届けられた。またこれらの情報を受信した支持者は、必ず最低一人の友人や知人に、自分のコメントをつけてメール内容を転送する仕組みになっていた。コメントをつけることによってお互いの対話が生まれ、そのネットワークは雪だるま式に大きくなっていった。その規模は1,300万人近くにも及び、うちおよそ100万人がボランティアの実働部隊としてオバマ支持への選挙運動を全米で幅広く展開した。これだけ多くの人が関わってくると、斬新なアイデアが次々と生まれる。そのひとつがユーチューブ (You Tube) である。ユーチューブはインターネットの動画共有サイトで、素人が撮影し編集した映像が画面に流される。オバマ支持者たちは選挙戦序盤から、自分たちが撮った映像をひっきりなしにユーチューブに乗せた。特に話題になったのが、「オバマガール」を自称する若い女性たちが、オバマと自分たちの映像を並べて歌う動画だ。タレント並みの人気となった彼女らは、2008年8月下旬デンバーで開催された民主党全国大会にも突然現れ、初日の夜にオバマガール決起パーティまで催した。これらはどこまでオバマ陣営が関わっているのか、あるいはあくまでも支持者たちの自主的な動きなのか、それは不明である。いずれにせよ2008年は、こうした動画共有サイトが大きな影響を及ぼす初めての大統領選挙となった。

オバマ陣営のインターネット戦略は、次の2点で大成功をおさめた。ひとつは従来政治にはあまり興味を持たない若者を選挙戦に引き込んだことだ。携帯電話やパソコンにオバマ支持の友人からメールが入り、自分の意見を求められる。まわりもみんなそうで、このオバマ・ブームに自分も乗らないと、1人取り残されるような気持ちになる、そしていつのまにかオバマ支持者軍団の一員となって全力で走っている、という感じである。もうひとつはお金である。アメリカの選挙における個人献金は上限2,300ドル。前半の予備選挙でヒラリー・クリントン候補は何万人もの支持者からこの上限である2,300ドルを集めた。しかしいったん集めたら、もうそれで最後である。しかしオバマはメールを通して5ドル、10ドルを求めた。支持者にすればカフェでのコーヒー1杯を

我慢し、5ドルを献金する。またそうすることによって自分もオバマ・キャンベーンの一員となった嬉しい連帯感を共有する。陣営にとってお金が足りなくなったら、「またあと5ドル、ご協力願えませんか」と頼むことができる。オバマはこの個人献金システムの組織化に見事に成功し、豊富な資金力をバックに選挙戦を進めることができたのである。

### 副大統領候補者が有権者の信頼感を変える

共和党のマケインが副大統領候補に選ぶまで、サラ・ペイリンという女性は全く無名だった。ペイリンは44歳。2006年に全米最年少で、アラスカでは初めての女性州知事となった。彼女はアラスカのワシラ市の市議員（1962年）、市長（1966年）となった。2男3女の母親であるが、その政治的信条は徹底した保守主義で、人工妊娠中絶、同性愛者結婚は絶対反対、死刑制度支持、銃器保持賛成といった共和党右派を代表する政治家である。党内で一匹狼的存在であるマケインにとって、共和党の支持基盤であるキリスト教右派が歓迎するランニングメイト（running mate=副大統領候補者）にする必要性があった。一方オバマはパートナーにデルウェア州選出の上院議員であるジョセフ・バイデンを選んでいて。バイデンは66歳。1973年に当選し、以来在職36年、2001年からは外交委員長の要職にある上院の重鎮である。彼には上院議員に当選した年、妻と幼い娘を交通事故で一度に失うという不幸があった。さらに同乗し瀕死の重傷を負った2人の息子を、その後不眠不休で看病したという思い出もあった。そのときあまりの失意のため、バイデンは上院議員になることをあきらめたという。しかし当時民主党指導者であったマイク・マンズフィールド院内総務（モンタナ州選出）に「妻と子供のため、政治に尽くせ」と説得され政界に入ったというエピソードを持つ。議員になって以来、自宅があるウィルミントンという町から片道1時間半かけてワシントンに電車通勤をしているというのも、バイデンの素朴な人間性を感じさせる。

アメリカの大統領選挙では副大統領候補が誰か、というのは有権者にとって

大きな意味を持つ。なぜならばもし大統領に万が一のことがあったとき、その職を継ぐのは副大統領だからである。1961年第35代大統領になったジョン・F・ケネディは志半ばで、1963年11月ダラスで暗殺者の凶弾に倒れた。副大統領から昇格したリンドン・ジョンソンは、その後アメリカをベトナム戦争の泥沼に引き込み多くの犠牲者を出した。アメリカ国民はそのことを決して忘れていない。

極めて残念なことではあるが、オバマが民主党内で大統領の有力候補になった瞬間から、アメリカでは「オバマ暗殺説」がささやかれるようになった。それは「黒人の大統領だけは絶対に許さない」というKKK（クークラックスクリン）といった白人至上主義の過激集団の主張である。オバマ大統領の誕生を歓迎しつつも、実は多くのアメリカ人が口にはださないものの「ケネディ暗殺再現の恐怖」を感じている。だからこそ、副大統領が重要となる。ここで悲劇を予測することはしない。ただ政治は現実である。外交的にも経済的にもオバマの未熟な部分をバイデンは包容し、いざとなったら自らが大統領としての職務を全うしてくれるという信頼感がある。一方マケインは72歳である。当選すれば、史上最高齢の大統領となる。ベトナム戦争で捕虜となり、5年間牢獄に拘束された身体的後遺症もある。たとえ当選しても4年後マケインの再選はありえるのか、これは共和党員ばかりでなく、国民の誰しもが疑問を感じていた。

共和党全国大会終了後の9月初旬、ペイリンの登場でマケインは支持率で一時的オバマを上まわることがあった。しかしその注目度がゆえ、ペイリンは集中的にマスコミの話題となった。インタビューを受け、「アフリカという国はどこですか」、「アラスカからロシアの町が見えます」といった訳のわからない発言をして有権者を当惑させた。極めつけはペイリンの横領とも思われる浪費だった。共和党は彼女に対して、副大統領候補の必要経費として15万ドルを用意した。彼女はそのお金でスーツを3着新調し、さらにブランド品を買いあさったと伝えられる。それも夫のスーツを含めてである。そうした批判に対してペイリンは「この服は私のものではない。共和党全国委員会が買った照明器具や舞台装置と同じだ」と弁明した。こうしたペイリンの言動を見たとき、多くの

有権者が高齢のマケインが倒れたとき、この人にアメリカを世界を、本当に任せることができるのかという、底知れない不安を感じた。マケインのペイリン選択は失敗だった。オバマは副大統領人選においても、マケインに勝利したのである。<sup>12)</sup>

### 大統領就任演説：「新しい責任の時代」

2009年1月20日、アメリカは新たな歴史の節目を迎えた。オバマ新大統領就任式の日である。極寒のワシントンは零下2度。しかしオバマの大統領就任を祝うため、全米から200万人以上の人びとがそこに集まった。大統領就任式としてこの観客数は、もちろん過去最多である。オバマはミッシェル夫人が持つリンカーン大統領が使用した聖書に手をおき、ジョン・ロバーツ連邦最高裁判所長官のことは従い宣誓した。そのときリンカーン記念堂周辺を埋め尽くした50万人以上の聴衆のどよめきが地面を激しく揺るがした。それはまさしくアメリカ史上初のアフリカ系(黒人)アメリカ人大統領誕生の歴史的瞬間だった。

人びとはかつてリンカーンやフランクリン・ルーズベルト、ケネディといった大統領の就任演説に見られた歴史に残ることばを期待していた。しかしオバマは選挙期間中の標語にしていた「チェンジ」「イエス、ウィー、キャン」ということばはまったく出さず、全体的に堅実な内容の演説だった。それは「もう選挙は終わり、これからは国に責任を持つ統治者となる」、というオバマの強い決意を示していた。彼は歴代44人の大統領宣誓のその多くが国家的危機の中でおこなわれたことを振り返り、「その苦難を乗り越えることができたのは、アメリカの人民がたえず建国の理想と精神に忠実であったからだ」と指摘した。アメリカの現状については「テロとの戦時下にあり、経済は著しく悪化している」との認識を表明した。また「それらの難題を短期間で対処することはできない、しかし私たちは必ず解決できる」と語った。「アメリカの再生」、これがまさにオバマのメッセージだった。「そのために今求められていることは新たな責任の時代であり、そこでは国民一人ひとりが自身と祖国に、そして世界に

責任があることを認識すべきである」と述べ、国家再生への自覚と努力を促した。これは1961年1月、歴史の残る名句となったケネディ大統領就任演説の、「国家があなたに何をしてくれるのかを求めるのではなく、あなたが国のために何ができるのかを考えよ!」ということばを彷彿させた。

一方世界との関わりについては、テロリストに対して「私たちの精神は一層強固であり、くじけることはない。先に倒れるのは君たちだ。私は君たちを打ち負かす!」と断言し、軍最高司令官としての不退転の決意を示した。しかしかつてブッシュ前大統領が「悪の枢軸」と呼んで名指しで非難したイラン、シリア、北朝鮮などの独裁的国家に対しては、「握りしめたそのこぶしを開くなら、私たちが手をさしのべるであろうことを知るべきだ」と、対話と協調を呼びかけた。

就任演説全体の中で、オバマが南北戦争と関連して人種隔離ということばを口にしたもの、黒人である自分についてはひとことも語ることはなかった。それはオバマ自身を含めて、彼を見つめる全米、全世界のひとたちが、「新しい合衆国大統領は白人でも黒人でもなく、ただアメリカ人なのだ」と感じたに違いない。こうして2009年大統領就任式は未曾有の国家的危機に直面しながらも、国民にとって自信と希望の新しい門出となった。

## 「チーム・オブ・ライバルズ」政権誕生

オバマは政権の人事にあたり、「チーム・オブ・ライバルズ（好敵手からなるチーム）」という歴史書を参考にしたといわれる。これはリンカーン大統領の統治を分析した分厚い本で、リンカーンが大統領選挙で党内指名を争ったライバルを陸軍長官に指名するなど、考え方の違った人物を自分の政権に取り組んだことからつけられた書名である。その名の通りオバマは党内指名争いで終始激しく戦い、ときには「オバマよ、恥を知れ!」と彼を恫喝したヒラリー・クリントンを、オバマ外交の顔となる国務長官に任命した。当初クリントンを副大統領候補にする可能性も指摘されたが、オバマは元ファースト・レディと

して世界の多くの指導者を知己にもつヒラリーを、外交の即戦力として最大限に活用できると判断した。一方年功序列が強い上院で、議員歴2期目のヒラリーには主要委員長職に就ける可能性はまだ低い。60歳の彼女にとってもしオバマ政権が2期8年続けば、その後の大統領選挙に再出馬するのも年齢的になかなかむずかしい。であれば事実上政権内第3位の立場となる国務長官となって、国政に自己の指導力を発揮したいと考えたに違いない。

オバマは国防長官に現職のロバート・ゲーツ（65歳）を留任させた。これはイラクからの米軍撤退問題と、アフガニスタンでの戦争が進む中で、現地と軍の事情を十分に把握しており、党派を超えた支持を集めるゲーツが政権にとって不可欠と判断したのであろう。またホワイトハウスで外交・安全保障チームの調整役となる大統領補佐官（国家安全保障問題担当）にはジェームズ・ジョーンズ（64歳）が起用された。彼は海兵隊総司令官、北大西洋条約機構（NATO）軍総司令官を歴任した40年近い軍歴をもつ人物である。自身ベトナム戦争にも従軍し、ブッシュ政権ではライス国務長官の中東特使（治安問題担当）としてイスラエルとパレスチナの和平交渉を担当するなど、外交経験が豊かである。クリントンの国務省、ゲーツの国防省の政策調整がジョーンズの仕事となる。

政権にとって緊急最重要課題が1929年の世界大恐慌以来といわれる金融危機である。その経済再建のため、オバマは経済界の重鎮と若手実力者2人を任命した。まず財務長官にはニューヨーク連邦準備銀行総裁のティモシー・ガトナー（47歳）を指名した。彼はクリントン政権のルービン、サマーズ両財務長官時代に財務官僚としてアジア通貨危機などに取り組んだ。またその後、アメリカの中央銀行である連邦準備制度理事会（FRB）のバーナンキ議長の副官として大手金融機関の共済策をまとめた経済界のホープである。さらに経済関連省庁の束ねる国家経済会議（NEC）議長には、クリントン政権の財務長官であるローレンス・サマーズ（53歳）を起用した。彼はアメリカを代表する経済学者で、財務長官退任後は母校のハーバード大学長を務めた。さらにホワイトハウスに新設し、官僚機構の外から政策提言をする「経済回復諮問会議」の

議長には、1980年代のインフレを強力な指導力で沈静化させた連邦準備制度理事会（FRB）のポール・ボルカー元議長（81歳）を就任させた。こうして外交、経済を中心に多彩な顔ぶれのオバマ政権が船出した。

## さいごに

2008年の大統領選挙。アメリカ人は変化を求めている。出口が見えない泥沼のイラク戦争。9.11同時多発テロ事件の首謀者を未だ捕まえられず、だらだらと続くアフガニスタン戦争。サブプライローン倒産に端を発した金融危機。地球温暖化による環境異変など、アメリカ人の誰しもが将来に対して底知れない不安と恐怖を感じていた。そこにバラク・オバマという得体のしれない政治家が現れた。母親は白人だが、肌が黒いのは父親がケニア人だからという。継父もインドネシア人で少年時代はイスラム教のインドネシアで過ごしたという。その後は多様性を象徴とするアロハのハワイで、白人の祖父母に育てられながら、中・高校時代を過ごす。大学はカリフォルニア、ニューヨーク、ボストン。仕事はコミュニティ・オーガナイザー。今までの大統領とはまったく異色の経歴である。そんなオバマが第44代大統領となった。それは今まさにアメリカ人が、アメリカという国が変わったことを意味している。今後4年間、あるいは8年間、今度はオバマがどうアメリカを変えていくかを、私はじっくりと見つめていきたい。

## 【注】

- 1) オバマの生い立ちと大統領になるまでの経歴については多くの書物が出されている。まずオバマが33歳のときに著した“*Dreams from My Father*”（邦訳は『マイ・ドリーム（オバマ自伝）』）でインドネシアでの少年時代から始まり、シカゴでの地域社会活動家としてのさまざまな経験、自己のルーツを求めてケニアを旅した様子が克明に描かれている。オバマ誕生の経緯についてはヘザー・ラー・ワグナー著の『バラク・オバマの軌跡』に簡潔な説明がある（pp.15～30）。



- 2) 「一滴の血のルール」については、自身オバマと同じ父親が黒人、母親が白人という出自をもつシェルビー・ステールが、彼の著書『オバマの孤独』の中で詳しく述べている (pp.12~22)。
- 3) 合衆国大統領が施政方針を示す演説は、通常「一般教書演説 (State of the Union)」と呼ばれる。毎年1月の最後の火曜日に行われるが、新政権の初年度は1月20日の大統領就任式と時期が重なるため、経済政策を中心とした「連邦議会合同会議における演説」となった。教育に関しては、「教育問題は民主党、共和党の問題ではない、合衆国の問題だ!」と論及した。演説の要旨は、英文ではInternational Herald Tribune、日本語では産経新聞、それぞれ1月26日号で見ることができる。
- 4) 2004年ボストンでの民主党全国大会2日目に行われたこの基調演説で、オバマは一躍全米のスターとなった。それまで無名のイリノイ州上院議員でしかなかったオバマだが、この大舞台に選ばれ、歴史に残る名演説を成し遂げた。これは現在、英語学習教材としても、スクリプトと実音声CDが幅広く使用されている。なおオバマの基調演説者としての大抜擢の経緯については、クリストフ・フォン・マーシャル著「ブラック・ケネディ」第5章 (pp.154~161) で詳しく説明されている。
- 5) 前述書、ワグナー著『バラク・オバマの軌跡』p.78参照
- 6) ミッシェルとの出会い、ロマンス、結婚、彼女の家族については、オバマの2番目の自伝 (邦訳)『合衆国再生』(第9章, pp.369~403) に詳しく述べられている。
- 7) 渡辺将人著『オバマのアメリカ』(幻冬舎新書, pp.144~199)。著者はアメリカで選挙運動家としての経験を持つ新進気鋭の研究者で、その視点はきわめて鋭い。
- 8) 越智道雄・町山智浩著『オバマ・ショック』(集英社新書, pp.143~180) 参照。
- 9) 読売新聞, 2008年11月6日朝刊。
- 10) 毎日新聞, 同上。
- 11) 金融危機発生への分析については、日本総合研究所チーフエコノミストである藤井英彦著『オバマのアメリカ』(東洋経済新報社) が参考となる。
- 12) タイム誌2008年12月29日/2009年1月5日合併号。
- 13) 副大統領の人選と経緯については、エバン・トーマス・ニューズウィーク誌著の『完璧な冷静』(阪急コミュニケーションズ, 第5章pp.109~130) 参照。

#### 【参考文献一覧】

- Barack Obama, "*Dreams from My Father*", (Three Rivers Press, New York, 1995) バラク・オバマ著(白倉三樹子・木内裕也訳),『マイ・ドリーム(バラク・オバマ自伝)』, (ダイヤモンド社, 2007)
- Barack Obama, "*The Audacity of Hope*", (Random House, Inc., New York, 2006) バラク・

- オバマ著 (棚橋志行訳) 『合衆国の再生 (大いなる希望を抱いて)』 (ダイヤモンド社, 2007)
- 渡辺将人著, 『オバマのアメリカ』 (幻冬舎新書, 2008)
- 村田晃司・渡辺靖著, 『オバマ大統領』 (文春新書, 2009)
- 越智道雄・町山智浩著, 『オバマ・ショック』 (集英社新書, 2009)
- シェルビー・スティール著 (松本剛史訳), 『オバマの孤独』 (青志社, 2008)
- ヘザー・レアー・ワグナー著 (宮崎朔訳), 『バラク・オバマの軌跡』 (サンガ, 2008)
- クリストフ・フォン・マーシャル著 (大石りら訳), 『ブラック・ケネディ』 (講談社, 2008)
- エバン・トーマス/ニュースウィーク誌著 (ニュースウィーク日本版編集部訳), 『完璧な冷静』 (阪急コミュニケーションズ, 2009)
- 海野素央著, 『アメリカがオバマを選んだ本当の理由』 (同友館, 2009)
- 藤井英彦著, 『オバマのアメリカ』 (東洋経済新報社, 2009)
- ナフタリ・ベンデビッド編 (松島恵之訳) 『OBAMA・オバマの真実』 (朝日新聞出版, 2009)
- 古森義久著, 『オバマ大統領と日本沈没』 (ビジネス社, 2009)
- Stephen Mansfield, “*The Faith of Barack Obama*”, (Thomas Nelson, Inc., Nashville)
- David Freddoso, “*The Case Against Barack Obama*”, (Regnery Publishing, Inc., Washington D.C.)

月刊誌『潮』, 2009年1月号

月刊誌『世界』, 2009年2月号

月刊誌『外交フォーラム』2009年3月